

永眠者が目覚めるまで

仙台宮城野教会牧師 齋藤 朗子

聖書 テサロニケの信徒への手紙一4章13~14節

¹³兄弟たち、既に眠りについた人たちについては、希望を持たないほかの人々のように嘆き悲しまないために、ぜひ次のことを知っておいてほしい。¹⁴イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています。神は同じように、イエスを信じて眠りについた人たちをも、イエスと一緒に導き出してくださいます。

日本聖書協会『聖書 新共同訳』

仙台北三番丁教会が属する日本基督教団では、毎年11月第1日曜日を「聖徒の日・永眠者記念日」と名付けています。多くの教会では、この日に神様の御もとへ召された人たちのことを想い起こす記念礼拝がもたれます。北三教会でも、コロナ禍の三年間を経て、久しぶりに従来のかたちで礼拝をおこなうことができました。多くの参列者とともに、本日の礼拝のときを持つことができたことに、心から感謝を申し上げます。

なぜ、この時期に「永眠者記念礼拝」を行うのでしょうか。それは古くからのローマ・カトリック教会にまつわる「伝統」に基づいているようです。カトリック教会では、毎年11月1日を「諸聖人の日」、その翌日である11月2日を「死者の日」としています。秋の収穫が終わり、草木が枯れ木となっていくこの季節を、人生の終わりをなぞらえたのでしょうか。11月というのは、なんとなく物悲しさを感じる晩秋の季節であり、寒い冬への備えを意識させるひと月と言えます。つまり、人間の死というものも、私たちの心に悲しさを想い起こさせる出来事であるというのも、実に納得できることなのです。

私と篤牧師は、おととい葬儀に参列するために東京へ出かけてまいりました。私が神学校を卒業してすぐ、篤牧師がドイツで宣教師の務めに当たるために、それに私は伴いました。しかし、私は当時、宣教師としての資格を得ることができませんでしたので、そのことを案じてくださった日本基督教団の世界宣教担当幹事を務めておられた先生は、自分が主任牧師を務める教会の伝道師として、私を迎えてくださったのです。実際、私はドイツにおりましたので、名ばかりの伝道師ではありましたが、そのおかげで牧師になるための試験を受けることができましたし、先生は私にいろいろと心の支えになってくださいました。その先生が去る日曜日に、神様の御もとに召されたのでした。私は、先生のなきがらに接したとき、悲しさがこみあげてきました。涙を流さずにはいられなくなりました。人が死ぬことに接する悲しさというものを、私はあらためて実感させられたのでした。

敬愛する人を、私たち自身の生活の場から失うというのは、本当に悲しいことなのです。だからこそ、私たちはイエス・キリストを通して、神が私たちひとりひとりに与えてくださった「復活の希望」というものを、聖書の言葉から、自分自身の希望として大切にするように教えられてきました。希望を抱くことを、バトンタッチするように、親から子へ、子から孫へ、教会は受け継いできたのでした。死がすべてを途絶えさせ、分断させることのないように、神が私たちを慰め、励ましつつ、「命は決して途中で終わるものではない」ということを、私たちに思い起こさせたのでした。

さて、本日私たちに与えられました聖書の言葉は、そのような希望について語られています。とても短い聖書の言葉ですが、是非耳と心で味わってみたいと思います。

新約聖書・テサロニケの信徒への手紙一4章13節をご覧ください。ここで、この手紙を書き記した使徒パウロは、テサロニケにあった教会の信者に向けて「兄弟たち」と呼び掛けています。キリストによって結ばれた兄弟姉妹のような存在である信者たちに対して、パウロは「既に眠りについた人たちについて」書き記そうとしています。そう。既に眠りについたとは、死の眠りについたという意味で、パウロは書き記しています。

そのパウロが「希望を持たないほかの人々のように」と、ある人たちが人間の死について感じていることについて言及しています。希望を持たないほかの人々のように。人間の死には希望が持てないと感じていた人たちが、確かにいることをパウロは明らかにしています。死んだら何もなくなってしまう。ただ悲しさばかりが募るがゆえに、希望すら感じるができなくなってしまう。そのような人間の現実というものを如実にパウロは手紙に書き記したのでした。

だから、パウロは「嘆き悲しまないために」と、手紙に綴ることができました。愛する人の死であればあるほど、私たちは嘆き悲しまないということが、いかに難しいかを痛いほど分かっています。だから、嘆き悲しまないようにというパウロの勧めが、無理難題を要求されているようにも思えるということもあるでしょう。それは古今東西、私たち人間にとっては共通する思いなのかもしれません。

そのような私たちに対して、パウロは「ぜひ知ってほしい」と言葉を続けます。14節でパウロは、「イエスが死んで復活されたと、わたしたちは信じています」と、まさに信仰の根幹について、手紙の読み手にあらためて知らせたのです。誰が信じているのでしょうか。「わたしたち」と、パウロは伝えています。何か他人事のような話ではなく、わたしたち一人ひとりが希望を抱けるように、イエスはキリストとなられたのだと、パウロは改めて私たちに思い起こさせようとしたのでした。

イエスは十字架に架けられることによって、長い時間の苦しみと孤独の末にその命は絶たれました。イエスは十字架上で神に叫んだのです。「わが神、わが神、なぜ私をお見捨てになったのですか」と。人間の死というものは、何かを道連れにすることが基本的にはできません。最終的には孤独にさせられる、辛い出来事に他ならないのです。神にも見捨てられたような感覚というものを、死にゆく当事者も、あとに遺された一人ひとりも突き付けられる。それが人間の死なのです。

しかし、イエスの死は死のままでは終わりませんでした。死から三日の後、収められた墓からイエスは復活しました。永眠者が永眠者のままでは終わらないということ、イエスの復活の出来事は証明したのでした。イエスによる復活の出来事は、イエスひとりの出来事として終わるものでなかったのです。イエスは、私たちすべてに対して、あなたがたも復活の命に活かされる者となることを、自分自身の希望として生きなさいと宣言されたのでした。

ですから、私たちはイエスの心を、自分の心のうちに刻み、収めることによって、希望ある人生を営むことができるということ、パウロはその手紙で、私たちに伝えようとしたのでした。そのような希望を与えてくださる神が、私たちもまたイエスと同様に、復活の命に活かされる者となるのだと。悲しみが悲しみのままでは決して終わらないと、力強く私たちを励ましています。「イエスと一緒に導き出してください」と、手紙にある通りなのです。

永眠者は「永遠に眠る者」という意味ではありません。眠りの向こう側に、永遠にわたる希望と命を私たちに与えられる神がおられる。それを、私たちの明日を生きる希望としたいのです。

昨年永眠者記念礼拝より今日まで、私たちは4名の愛する姉妹たちを、神様の御もとへ送りました。昨年12月には、藤元りゑ（ふじもと・りえ）さんを、そして、古田千恵子（ふるた・ちえこ）さんが、地上における生涯を閉じられました。そして、今年に入ってから、7月に昆野恭子（こんの・きょうこ）さん、9月に山本琴（やまもと・こと）さんが、突然神様の御もとに召されました。それら姉妹たちのことを、それぞれに与えられた思い出を胸にしなから、神様の永遠の平安のうちにあることを、私たちは希望とすることができるのです。

そして、本日は、畠山勝造（はたけやま・かつぞう）さんと、そのお連れ合いである畠山まつ（はたけやま・まつ）さんのことも記憶にとどめたいと思います。おそらくここにおられる皆さんの誰もが会われたことのないお二人だと思います。このお二人は、北三教会が北星バプテスト教会として97年前に建てられたごく初期のメンバーであった方です。仙台の地から静岡へ転居されたために、その後の消息が分かりませんでした。この夏、お二人のルーツを調べていたお孫さんが来会されて、畠山さんご夫妻が、確かに北三教会の歴史を刻んでいた先達たちであったことが分かった次第です。

今名前を挙げました4名の姉妹たちと、ひと組のご夫妻のことも覚えつつ、今日、写真が飾られている方々のすべてを思い起こしつつ、また、写真に収めることのできないものの、神が確かに希望のうちに覚えてくださっているすべての兄弟姉妹たちのことを想いつつ、ともに祈りをささげましょう。

祈り

永遠の希望を与えられる主なる神様。

私たちを悲しみの淵から希望の光へと招かれるあなたが、希望を私たちに与えてくださいますよう、心からお願いいたします。

永眠者から目覚められた復活の救い主、イエス・キリストのお名前によって祈ります。

アーメン。